

一般演題

第二会場 多目的室 1

9:50～10:50 作業に焦点を当てた介入

座長：福井総合病院 前田 満昭

O-01 生活行為に焦点を当てた上腕骨外側上顆炎の保存的治療の1例

春江病院 見沢 亮丞

O-02 チェックリストを用いて自己効力感を高め入浴自立に繋がった一例

嶋田病院 植田 笑見

O-03 作業に焦点を当てた介入により料理の役割獲得へつながった症例

嶋田病院 斎藤 あさひ

O-04 ACPにおいてリハビリテーション専門職が担う役割について

～非がん患者の2事例を経験して～

公立丹南病院 加藤 敬子

13:30～14:30 身体障害

座長：福井厚生病院 江川 健一

O-05 クラゾセンタン投与後合併症により早期介入に難済したクモ膜下出血症例

福井赤十字病院 荒井 麻衣

O-06 脳梗塞後の痙攣に対し上腕三頭筋への振動刺激を実施した一症例

福井大学医学部附属病院 中川 朋美

O-07 疼痛の訴えの強い、後縦靭帯骨化症術後症例に対する作業療法経験

公立丹南病院 白井 喜実

O-08 短期間で入退院を繰り返した高齢心不全患者に対して再入院予防のための支援を行った1症例

福井総合病院 熊狼 妙子

O-09 呼吸器管理からの早期離床・離脱支援により ADL 動作の獲得につながった症例

福井県立病院 李澤 真希

14:40～15:40 用具選定・発達支援

座長：げんきの家 山川 愛

O-10 3D プリンタ製スパイダースプリントの指先端構造検証

～形、素材の違いによる当院作業療法士の推奨度評価～

福井総合病院 高木 冬唯

O-11 特発性側弯症によりリーチ動作が困難となった症例への自助具作製支援

嶋田病院 藤本 聖菜

O-12 非伸縮性テーピングが筋萎縮性側索硬化症患者の母指対立機能に与える影響－症例報告－

福井大学医学部附属病院 山岸 永典

O-13 ASD 児に対する遊びとコミュニケーションの介入一例～OTST の協働～

福井県こども療育センター 木下 美智子

O-14 教育現場における作業療法士の支援の現状と今後の課題

～研修会参加者アンケートより見えてきたもの～

福井医療大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻 蓑輪 千帆

15:50～16:50 地域支援・社会活動

座長：嶋田病院 加福 己里宜

O-15 個としての受刑者、集団としての刑務所に精神科作業療法士は何ができるか

医療法人 嶺南こころの病院 南出 耕佑

O-16 パーキンソン病友の会スマイルイベントの企画に携わって

こばんだ訪問看護ステーション 佐藤 英子

O-17 地区の花見会における壮年団の活動報告

福井赤十字病院 山本 和雅

O-18 フレイル予防における作業活動の有効性

春江病院 田嶋 神智

生活行為に焦点を当てた上腕骨外側上顆炎の保存的治療の1例

○見沢 亮丞¹⁾, 前田 陽平²⁾, 中山 幸保¹⁾,
松儀 怜³⁾, 正眞 康宏¹⁾

- 1) 春江病院 リハビリテーション課 作業療法士
- 2) 春江病院 整形外科 医師
- 3) 春江病院 リハビリテーション課 理学療法士

キーワード：上腕骨外側上顆炎，生活行為，COPM

【はじめに】

当院における上腕骨外側上顆炎の治療は、保存療法を第一選択として作業療法も行っている。また近年では、体外衝撃波療法（以下 ESWT）の有用性も散見される。今回、疼痛により生活行為を制限された症例に対し、障害形成プロセスの理解、セルフケアと動作指導、生活行為に焦点を当てた作業療法、拡散型 ESWT を併用した介入を行うことで、患者満足度の改善に寄与したため報告する。本報告は対象者に説明し同意を得ている。

【症例紹介と介入経過】

症例は 50 歳代女性の事務職で右利きである。飼い犬（約 15kg）の介護中に右肘外側部痛が出現し、発症から 2 ヶ月後に当院を受診した。右上腕骨外側上顆部に圧痛所見あり、Thomsen test, 中指伸展テスト陽性。X 線検査では明らかな変形や骨病変は認めず、短橈側手根伸筋腱付着部の骨硬化像や石灰化所見も認めなかった。超音波検査では腱周囲の液体貯留所見あり、右上腕骨外側上顆炎と診断され、作業療法と拡散型 ESWT が開始となった。消炎鎮痛剤内服・外用薬、器具も併用し、伸筋ストレッチや疼痛誘発しやすい肢位での過使用は避ける等の生活指導を行い、障害形成プロセスとセルフケアの理解を深めるよう支援した。COPM も用い①キーボード・マウス操作、②犬の散歩・スコップ操作（糞便の始末）が重要な生活行為として挙げられ、これらに関する自己認識と経時的变化、代償手段について評価と提案を行った。

【結果】

治療期間は約 4 ヶ月間であった。VAS は安静時 40mm から 0mm。運動時 (Thomsen test) 56mm から 0mm に改善した。患者立脚型評価 DASH は Disability/symptom score で 38.3 点から 5 点、Work score は 18.8 点から 0 点に改善した。Hand20 は 20 点から 3.5 点に改善した。COPM の重要度/遂行度/満足度は、①キーボード・マウス操作は初期 10/10/4、最終 10/10/8。②犬の散歩・スコップ操作（糞便の始末）は初期 10/10/4、最終 10/10/8 であった。

【考察】

本症例は、比較的早期に治療を開始し慢性的な経過ではなかったこと、X 線検査で明らかな骨病変、骨硬化像や石灰化所見も認めなかったこと、コンプライアンスが良好であり、継続した作業療法、ESWT が可能であったことが難治化せず経過し、良好な成績に寄与したと考える。

チェックリストを用いて自己効力感を高め入浴自立に繋がった一例

○植田 笑見¹⁾, 池本 謙志朗¹⁾, 天谷 真樹²⁾,
板倉 麻衣子³⁾

- 1) 嶋田病院 リハビリテーション部 作業療法科
- 2) 嶋田病院 リハビリテーション部 理学療法科
- 3) 嶋田病院 リハビリテーション部 言語聴覚科

キーワード：自己効力感、チェックリスト、フィードバック

【はじめに】

脳出血を呈し、失語症や身体機能の低下により自己効力感が低下したため入浴動作への不安により自立できない症例を担当した。自立に向けてチェックリストを導入し自宅復帰まで支援した。本人に書面にて同意を得た。

【症例紹介】

60 代女性。発症前の日常生活動作は自立していた。自営業を営み、家事や義母の介護を行っていた。X 日に言語障害が出現し急性期病院を受診し左皮質下脳出血と診断。X+23 日に当院へ転院した。当院転院時の上田式片麻痺グレード右上肢 11 手指 11 下肢 11。ウェルニッケ失語あり日常会話においても支障がみられ配慮が必要。FIM69/126 点。X+26 日より一般浴での入浴練習を開始した。動作練習を反復し実施していくことで動作や浴室環境のセッティングは声かけなしで可能となった。

【初期評価】

入浴は状況の理解などが不十分で不安が強く見守りが必要な状態であった。入浴に不安が強い原因として滑る環境下での転倒リスクの恐怖や入浴準備に自信がない点が考えられた。本人より元の生活に戻りたいと希望聞かれたため入浴自立を目標とした。

【介入経過】

X+99 日入浴自立に向けて本人に聴取したところ見守りなしでの環境変化に「不安しかない」との発言が聞かれたため入浴チェックリストを使用し入浴動作の振り返りを実施した。チェックリストの項目として衣服や浴室環境の準備から更衣、洗体、浴槽移乗に至るまで一連の流れについて提示した。入浴後に症例とともにチェックリストを使用し“できた”と“できなかった”を明確にした。X+137 日にチェックリストの項目が全て“できた”となり、本人より「大丈夫」と発言があったため入浴自立とした。

【最終評価】

上田式片麻痺グレード上肢 12 手指 12 下肢 12。ウェルニッケ失語は残存したが推測しながらの意思疎通は可能となった。FIM113/126 点。笑顔も増え退院後の生活に関し「なんとかなると思う。少し前向きになれた」との発言も聞かれた。「少しづつ家事もしていきたい」と今後の希望も聞かれた。

【考察】

入浴動作は基本的日常生活動作のなかで最も難易度の高い動作である(村田ら, 2022 年)。また、患者がセルフケア活動を実施することに成功したとき、その体験は自己効力感の程度に影響する(魚尾ら, 2011 年)。チェックリストを使用し成功体験を重ねたことで自己効力感が向上し自立に繋がったと考えられる。

作業に焦点を当てた介入により料理の役割獲得へつながった症例

○斎藤 あさひ¹⁾, 小野島 麻美¹⁾

1) 嶋田病院 リハビリテーション部 作業療法科

キーワード : COPM, 料理, 意味のある作業

【はじめに】

今回、料理の役割獲得を目指した片麻痺を呈した症例を担当した。「料理ができるようになりたい」という希望が聞かれたが、実際の練習場面では「手が動かないから」というように機能的な面ばかりに意識が向いていた。COPM（カナダ作業遂行測定）を用いて作業に焦点を当てた介入を行ったことにより、クライエント自身が作業における課題点に意識を向けることができた。それにより退院後の料理の役割獲得へつながった症例を報告する。発表に際し対象者に書面にて同意を得た。

【症例紹介】

60代後半の女性。夫と二人暮らし、娘夫婦・孫と敷地内同居。仕事で忙しい娘夫婦の代わりに孫の面倒などもみていた。料理は家族分3食作っていた。X日、ラクナ梗塞にて急性期病院に入院し、X+27日、リハビリ目的にて当院に転院となる。

【介入経過・結果】

X+27日、初回の面接評価にて「料理ができるようになりたい」との希望が聞かれた。しかし実際は「手が動かないんだから料理なんて出来るわけないじゃないですか」とCOPMの点数を付けられない状態であった。生活上での右手の使用しづらさにより料理については具体的に考えられていない様子であった。そのため、麻痺側の促通運動、日常生活動作練習から始め、料理の模擬練習を組み込んでいった。徐々に料理に対する前向きな発言が聞かれるようになり、料理練習を開始した。練習終了毎にCOPMにて遂行度、満足度の評価を行った。また、本人に振り返りを促し、動画を見返しながらフィードバックを行った。それにより、「手が動くように」ではなく、作業における課題点や具体的な原因、代償手段を主体的に考えられるようになった。4回の料理練習を行った後、COPMにて再評価を実施した。遂行度8、満足度8.と向上した。退院後に電話での聞き取りを行い、毎日料理ができておらず、お弁当なども活用しながら継続して行えているとのことだった。

【考察】

今回、クライエントがよく作っていたメニューを聴取し、普段通りの工程で行った点、終了後に本人の振り返りやフィードバックを行った点が作業上の問題解決への主体的な参加へつながったと考える。また、本人にとって意味のある料理という作業を用いた点や、作業における課題点・問題の原因を主体的に考え、具体的な目標を持って練習を行えた点が、作業の改善につながったと考える。

ACPにおいてリハビリテーション専門職が担う役割について～非がん患者の2事例を経験して～

○加藤 敬子¹⁾

1) 公立丹南病院

キーワード : ACP, 人生会議, リハビリテーション

【はじめに】

アドバンスケア・プランニング（以下ACPとは）「将来の医療及びケアについて、本人を主体に、その御家族等や近い人、医療・ケアチームが繰り返し話し合いを行い、本人による意思決定を支援する試み」である。今回、非がん患者に対するリハビリテーション（以下リハビリ）を介して、ACPを実践し、目標設定につなげた2事例を経験したので、以下に報告する。

【今回の試み】

当院では、2019年5月よりがん患者に対し、医師が患者家族に説明する形でACP実践を開始した。非がん患者に対する実践例は少なく、またリハビリ専門職を中心とした実践例はみられない。今回、非がん患者に対するリハビリ介入中に本人や家族の思いを聴取し、ACPを実践した。ACPによって得た情報を踏まえ、目標設定を行い、リハビリを実施した。以下に2事例を報告する。尚発表に際し患者に同意を得ている。

【事例紹介】

事例1：70代、女性、誤嚥性肺炎、パーキンソン病、要介護4。有料老人ホーム入所中、近隣に妹在住。

HDS-R16点で意思決定可能。ACPよりトイレに自分で行きたい、胃ろうは嫌との希望あり。合意目標として介助下でのトイレ動作獲得、食事動作自立とし、プログラム施行。結果、病状悪化のため排泄は介助、食事は楽しみ程度のみとなった。中心静脈栄養留置となり、長期療養型病院に転院となった。事例2：70代、男性、誤嚥性肺炎、レビー小体型認知症、要介護1.妻と同居。HDS-R1点でコミュニケーション困難。ACPは家族からの聞き取りにて聴取し、胃ろうは嫌、食べれなくなつても家と一緒に過ごしたい。合意目標として、ベッド上で安楽に過ごし、自宅退院することとし、プログラム施行。結果、経口摂取困難となつたが、環境調整を行い自宅退院。27日後、自宅にて永眠された。

【考察】

進行性疾患においては、病状の進行とともに認知機能が低下し、本人の意思決定が困難になるといわれている。今回1事例目は、意思決定が可能な時期に話し合いができたが、2事例目は、コミュニケーション困難事例であり、家族の意向が反映された可能性がある。本人中心の望む生き方を支援するためには、診断早期からACPを実践する必要があると考える。またリハビリ専門職の強みを生かし、マンツーマンで思いを傾聴し、予後予測を踏まえてリハビリを提供することで、リハビリ専門職がACPチームの主体となれると考える。

クラゾセンタン投与後合併症により早期介入に難渋したクモ膜下出血症例

○荒井 麻衣¹⁾

1) 福井赤十字病院

キーワード：くも膜下出血、脳血管攣縮

【はじめに】

脳血管攣縮予防薬クラゾセンタンは脳血管拡張作用を有する薬剤であるが投与期間中、胸水など体液貯留を呈する症例を経験することがある。今回くも膜下出血発症後、複数の合併症に加え、胸水、肺水腫を呈した1例の経過を報告する。

【症例】

70代女性。元々ADL,IADL自立。診断名:右A1動脈瘤破裂によるくも膜下出血。Grade:WFNS1現病歴X年Y月Z日意識消失し救急要請。その後呼びかけに反応あり両側頭部NRS5の頭痛を自覚し当院に搬送され同日コイル塞栓術施行。スピナードレーンを装着してICUに入室。Z+2日後にSCUに退出し作業療法を開始した。本発表において対象者に説明を行い同意を得ている。

【経過】

Z+2日後介入開始。初期評価GCS:E4V4M6明らかな麻痺、感覚障害なし。頭痛NRS7。見当識障害を認めた。HOPEは運動再開。クラゾセンタン投与期間中(Z日～14日)胸水、肺水腫を認めた。Z+6日SPD抜去までは酸素療法、端座位訓練、RealityOrientationなどを中心に実施。Z+10日尿路感染症で発熱。Z+12日胸水、腹水著明であったが、リスク管理をしながらADL訓練を継続した。Z+21日目E3～4V4M6反応遅延を認め、検査にて認知機能の低下を認めた。Z+28日目水頭症に対し腰椎一腹腔シャント術施行された。本人の運動再開に必要な要素である注意機能訓練を中心に実施した。最終評価Z+44日ADL自立。HDS-R・MMSE30点、FAB13点TMT-Ja51秒b141秒で高次脳機能の改善を認め、Z+50日転院となった。退院後運動再開されたとの情報を得た。

【考察】

クモ膜下出血における予後不良因子として、遅発性脳血管攣縮が挙げられている。(日本神経治療学会)。そして、予防薬として効果があるクラゾセンタンの副作用として体液貯留、脳血管攣縮、胸水、肺水腫、貧血などが報告されている(藤本、2024)。本症例においても、貧血、肺水腫、尿路感染症、胸水、腹水、正常圧水頭症といった複数の合併症を併発し、対応に難渋した。しかし、早期離床とADL訓練の維持によって合併症の重篤化を予防し、患者自身の主体性を引き出すことへと繋がり、長期的には運動再開支援の一助になったと考えられる。

脳梗塞後の痙攣に対し上腕三頭筋への振動刺激を実施した一症例

○中川 朋美¹⁾, 亀井 絵理奈¹⁾, 長谷川 大輝¹⁾, 横本 崇一²⁾

1) 福井大学医学部附属病院 リハビリテーション部

2) 福井大学医学部附属病院 脳神経内科

キーワード：脳梗塞、痙攣、振動刺激

【はじめに】

脳梗塞により生じる痙攣の治療法として、持続伸張法や電気刺激などがある。その中でも痙攣筋の拮抗筋に対する振動刺激は、筋緊張抑制の一定の有効性が報告されている。今回、脳梗塞後の痙攣に対し上腕三頭筋への振動刺激を行った一症例の経過について報告する。本報告にあたり本人の同意を得ている。

【症例】

症例は70代男性で、X日に左上下肢麻痺が出現し、右アローム血栓性脳梗塞と診断され入院となった。利き手は右で、入院前ADLは自立していた。

【初期評価】

上田式片麻痺機能テストは左上肢手指ともにgrade11であった。Semmes Weinstein monofilaments test (SWMT) では左I-V指が脱失しており、Simple Test for Evaluating Hand Function (STEF) では右91/100点、左17/100点と左上肢機能低下が認められた。上腕二頭筋のModified Ashworth Scale (MAS) はグレード2であり、ADL上で麻痺手の参加は無かった。

【方法・経過】

レイマックスモジュールバイター(明光通商社製)を用い、上腕二頭筋の拮抗筋である上腕三頭筋を対象筋とした。刺激部位は上腕三頭筋腱とし、周波数を28Hz、実施時間を10分に設定した。X+15日～16日では、開始時MAS2が終了時にはMAS1+へ改善した。X+19日からはmobisit(日本シグマックス社製)に変更し、周波数は10-12Hzの範囲で調整した。実施時間および対象筋は同様とした。X+19日は10Hzで実施し、開始時、終了時ともにMAS2であった。X+20日以降は12Hzで実施し、X+20日のみ終了時MASは1+となり、それ以降はMAS2であった。

【最終評価】

上田式片麻痺機能テストでは変化が認められなかった。SWMTでは左I-V指防御知覚低下～脱失、STEFでは右91/100点、左34/100点と左上肢機能の改善が認められた。MASは変化が無かったが、ADLでは麻痺手の参加がみられるようになった。

【考察】

脳梗塞後の痙攣に対する振動刺激には多くの報告があるが、設定条件は研究により異なる。本症例では先行研究に基づき約30Hzでの振動刺激を実施したが、MAS上の改善は限定的であった。その他の報告では100Hzでの有効性も示されており、今後は周波数設定を含めた刺激条件の検討が必要である。

疼痛の訴えの強い、後縦靭帯骨化症術後症例に対する作業療法経験

○白井 喜実¹⁾

1) 公立丹南病院

キーワード：後縦靭帯骨化症、痛み、ADL

【はじめに】

頸椎後縦靭帯骨化症（以下:OPLL）に対する後方除圧固定術（以下:PDF）に、頸部周囲の疼痛・上肢機能低下によりADLの低下を認めた症例に対し作業療法介入を行い、疼痛の軽減・上肢機能向上がみられ、自宅退院へ至った症例を経験したので報告する。

【症例紹介】

70歳代の男性、X-1か月頻尿を主訴に受診。OPLLの診断を受ける。X日他院にてPDFを施行しX+22日目に当院へリハビリテーション目的に転院し同日、作業療法介入開始となった。主訴は「首が疲れてきて長い事起きていられない」であった。尚、発表に際して症例に説明し同意を得ている。

【初期評価（X+23日）】

FIM85点（運動56点、認知29点）ROMは、肩関節屈曲自動（R/L）Active115/60° Passive120/120° 外転A100/60° P100/95° .MMTは、三角筋（R/L）4/3 上腕二頭筋4/4 橋側手根伸/筋4/4 上腕三頭筋4/4 深指屈筋4/4。握力は<5kg/5.8kg。簡易上肢機能検査（以下:STEF）は、75/84点。安静座位時で頸部肩甲帶周囲に疼痛をNRS6～7程度認めた。

【介入内容】

プログラムは、①関節可動域運動②レジスタンストレーニング③ADL動作練習とし、重錘や道具の強度で段階付けを行い、症例のレベルに合わせた道具の使用・環境調整を行った。

【最終評価（X+60日）】

FIM104点（運動75点、認知29点）ROMは、肩関節屈曲（R/L）A135/135° P160/160° 外転A150/145° P160/170° .MMTは、三角筋（R/L）4/4 深指屈筋5/5、握力は6.3kg/10.3kg。STEFは、88/95点。安静時の疼痛は訴え無くなり、左肩運動時NRS0～1程度と軽減がみられた。

【考察】

症例は、継続する疼痛・疲労感に対して破局的思考を持ち、痛みを伴う動作を回避し、日常生活での活動性低下や廃用・不活動によりADL・QOLが増悪していく痛みの悪循環に陥っていたと考える。運動中～後に痛覚感受性が減弱する現象を、運動による疼痛緩和と言い、有酸素運動やレジスタンストレーニングにより得られることが報告されている。（萩野、2021）本症例においても、運動による疼痛緩和と症例のレベルに合わせたADL動作練習により、疼痛・不安感をコントロールしADL動作能力の向上へつながったと考える。

短期間で入退院を繰り返した高齢心不全患者に対して再入院予防のための支援を行った1症例

○熊狼 妙子¹⁾、出村 武志¹⁾、面湫 由美恵¹⁾、白崎 温久²⁾

1) 福井総合病院 リハビリテーション課 作業療法室

2) 福井総合病院 循環器内科

キーワード：心臓リハビリテーション 環境整備 再入院

【はじめに】

慢性心不全患者は高齢者が多く、心不全増悪による再入院を反復し、入退院を繰り返すうちに状態が段階的に低下し死に至るとされており、再入院を予防することが重要である。今回、心不全増悪による入院加療後、約1ヶ月で再入院した患者に対して再入院予防の支援について検討した。尚、今回の報告に際し対象者本人および家族より同意を得ている。

【作業療法評価】

90歳代女性、HDS-R19点

【診断名】慢性うっ血性心不全の急性増悪

【現病歴】X年Y月Z日から8日間、心不全増悪と貧血進行にて入院。退院約1ヶ月後、下肢浮腫増悪を認め外来受診。検査にて心不全増悪を認めた。その際、退院後に内服薬を処方通りに飲めてないことが判明。外来受診から5日後、浮腫の増悪と倦怠感・脱力により体動困難となり救急搬送され再入院。

【検査所見】左室駆出率：72%、NT-proBNP：2513pg/mg。

【心不全基礎疾患】大動脈弁狭窄症（軽～中等症）、貧血、甲状腺機能低下、慢性腎臓病

【入院前の生活】独居、ADL自立、移動は押し車歩行、家事や畠作業を行っていた。要介護1の認定を受け、週2回通所介護を利用。

【本人の希望】自宅に戻り畠仕事を再開すること。

【作業療法計画】

多職種カンファレンスにて介入方針を検討、内服管理を徹底し一人暮らしを再開することを目標とし、心臓リハビリ急性期離床プログラムに沿って活動を拡大し日常生活動作自立を図ることを決定。

【経過・結果】

利尿薬投与と内服薬再開にて心不全は代償され、病棟内のADLは概ね自立し自宅退院となった。入院中は再入院防止について本人と話し合う時間を設けることで心不全療養の理解を深めた。服薬管理は、訪問看護による支援が受けられるよう調整した。退院1ヶ月後、心不全増悪の兆候は認めず再入院はしていない。

【考察】

退院後の生活を想定して病棟内での活動の拡大を図ること、患者本人の意思や価値観、認知機能に合わせて療養指導を行うことが有効であったと考える。多職種が介入したことにより、患者自身の心不全管理の重要性の理解に繋がり、心不全代償後にスムーズに退院支援を行うことができた。

【まとめ】

高齢心不全患者に対する心不全療養指導においては、多職種が連携し、本人の生活歴や生活様式、価値観等を踏まえた介入を行うことが重要である。

呼吸器管理からの早期離床・離脱支援により ADL 動作の獲得につながった症例

○李澤 真希¹⁾

1) 福井県立病院

キーワード：急性期、離床、早期リハビリテーション

【はじめに】

急性期における離床の重要性が認識され、せん妄、廃用症候群の予防、早期 ADL 再獲得に効果があるとされている。今回、左内頸動脈瘤破裂によるくも膜下出血を呈し、その後、人工呼吸器管理となった症例を担当する機会を得た。理学療法士（以下 PT）と一緒に介入し、離床、呼吸器の離脱、ADL 動作の獲得につながった症例について報告する。

【症例紹介】

50 代男性。体重は 100kg と肥満傾向であった。X 日頭痛、嘔吐により発症。動脈瘤の大きさは 10mm 大であり、coiling を実施し、早期退院を目指す予定であった。しかし、翌日より呼吸状態の悪化があり、気管挿管実施。抜管後も呼吸状態悪化が続き、胸水貯留、心拡大あり、肺炎も併発。血圧低値もみられてきた為、病日 9 日目に気管切開にて人工呼吸器管理となり、人工呼吸器からの離脱が目標となった。発表にあたり症例に説明し同意を得ている。

【介入経過】

病日 5 日目より PT 開始。安静度に応じて、ベッド上にて四肢運動、ベッドアップ座位を行い、咳嗽やハフィングなどの排痰を実施した。しかし、覚醒の問題があり、排痰はわずかな状態であった。病日 14 日目より OT 開始。初期評価は、FIM:18 点。JCSIII 桁であった。早期の呼吸器離脱を目指し、PT と一緒に介入した。端坐位にて排痰補助、換気促通を促すと、自己喀痰がみられた。離床を促すことで覚醒、意識レベルの改善がみられ、四肢の筋出力がみられてきた。立位、車椅子移乗と離床を進め、肺炎が改善し、翌日より日中のみ呼吸器離脱が可能となり、歩行器歩行を開始した。5 日後には、終日人工呼吸器からの離脱が可能となった。筆談にて希望、意向を把握するための質問をしたところ、「トイレに自分で行きたい」と希望がきかれた。転院前には、カニューレ抜去し FIM:102 点となった。病室からリハビリ室までの独歩が見守りレベルで可能となり、食事、排泄、更衣動作も見守りレベルで自立した。

【考察】

呼吸器管理患者の早期リハビリテーションに関わることで、①覚醒と意識レベルの向上②人工呼吸器関連の肺炎の予防・改善③呼吸筋の委縮を防ぐができると考える。これらが、呼吸器管理からの離脱につながり、早期 ADL 動作の獲得につながったと考える。

3D プリンタ製スパイダースプリントの指先端構造検証～形、素材の違いによる当院作業療法士の推奨度評価～

○高木 冬唯¹⁾、酒井 涼²⁾、山田 克範¹⁾、
佐藤 万美子³⁾、小林 康孝³⁾

- 1) 福井総合病院 リハビリテーション課 作業療法室
- 2) 福井医療大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻
- 3) 福井医療大学大学院 研究科 保健医療学専攻

キーワード：3D プリンタ、スプリント、評価

【はじめに】

近年、医療分野における 3D プリンタ技術の活用は著しく進展し、作業療法分野でも普及が進む。家庭用 3D プリンタの高性能・低価格化により個別性の高い自助具作製が容易となつたが、複雑な構造を有する装具、特に脳卒中患者に用いる 3D プリンタ製装具の報告は依然少ない。本研究は臨床で頻用されるスパイダースプリントの指先端構造に着目し、最適化と導入障壁の軽減を目的に新規デザインを検証した。

【対象と方法】

Fusion 360 (Autodesk 社) で設計し、Bambu Lab A1 および A1 mini で造形した。素材は PLA Basic (素材 A)、TPU (素材 B)、形状は C 字円柱型 (形状 a) と涙嚢型 (形状 b) とし、A-a, A-b, B-a, B-b の 4 条件を母指および示指～小指の計 8 種類作製した。装具治療経験を有する OT20 名を対象にアンケートを実施し、推奨度をリッカート尺度で評価し、併せて自由記載形式で意見を収集した。解析は Friedman 検定と Dunn 検定 (有意水準 5%), 自由記載は KHCoder を用いた。本研究は新田塚医療福祉センター倫理審査委員会承認及び対象者の同意を得て実施した。

【結果】

対象 OT の経験年数は平均 11.9 ± 8.9 年であった。母指、示指～小指ともに 4 群間で有意差を認めた ($p < 0.0001$, $p = 0.0158$)。母指では A-a と B-a ($p = 0.0162$), A-a と B-b ($p = 0.0005$), A-b と B-a ($p = 0.0057$), A-b と B-b ($p = 0.0001$) で有意差を認め、TPU 素材や涙嚢型が高評価を得た。示指～小指では A-b と B-b 間で有意差を認め ($p = 0.0423$), TPU 素材が好評であった。自由記載では「TPU 素材は手部装具として皮膚への負担が少ない」や「PLA 等硬い素材は痛い」等が抽出された。

【考察】

母指・示指～小指ともに B-b (TPU 素材・涙嚢型) の推奨度が高かった。TPU は弾力性・耐力性・防水性を有し、手部装具素材として適していると考えられる (重田, 1996; Sardinha et al., 2025)。一方、形状 a は柔らかさゆえに指から抜けやすいが、形状 b は強度が高く耐久性が評価された可能性がある。

【結語】

本研究より 3D プリンタ製スパイダースプリントの指先構造として TPU 素材・涙嚢型が有効と示唆された。今後は形状記憶合金等との組合せによる臨床応用を検討していく。

特発性側弯症によりリーチ動作が困難となった症例への自助具作製支援

○藤本聖菜¹⁾, 近藤藍¹⁾

1) 嶋田病院 リハビリテーション部 作業療法科

キーワード：作業療法，自助具，入浴

【はじめに】

今回、特発性側弯症により後方矯正固定術後の20代女性を担当した。関節可動域制限があり、身体各部へのリーチ困難さがみられていた。「自助具とは、動作を容易に自分で行えるように工夫された道具であり、作業療法士は障害の程度や状態に応じた自助具の提案や作製をし、自助具を用いた治療をすることで、対象者がよりよい日常生活が送れるよう支援することが求められる」(大石, 2024)と述べられている。

今回の症例に対して、自助具を検討したことにより日常生活動作が自立出来たため、以下に報告する。なお、今回の報告にあたり、当院倫理委員会の承認を得ており、本人から同意を得ている。

【症例紹介】

20代女性、診断名は特発性側弯症、X日に後方矯正術を施行し、X+36日後に当院に転院となる。

【初回評価】

頭頸部、体幹、肩関節に関節可動域制限、疼痛もあり。FIMは清拭4点、更衣(下衣)2点で、入浴時の洗体や更衣動作に介助が必要であり、悲観的な発言が多く聞かれていた。

【介入経過】

関節可動域の改善は乏しく、疼痛も継続していた。「自助具の材料は破損や修理に備えて量販店での入手が可能で安価な物、作製が容易なものを考慮」(中川, 2007)と述べられており、本人からも「身近なものを使いたい」との希望が聞かれた。今後の長期間の利用も考え、今回は市販品から選定していく。

足部や背部の清拭には、市販の長柄ブラシを提案した。頭部の清拭には、市販の長柄の靴べらの先端に、市販の頭部を洗うブラシを接着した。下衣の裾通しには、スポンジ付きの長柄の市販品を提案した。靴下の着用には、ソックスエイドを作製した。

【最終評価】

FIMは清拭6点、更衣(下衣)6点となり、自助具を使用し入浴動作は自立した。症例の笑顔が増え、前向きな発言が多く聞かれるようになった。

【考察】

自助具は「対象者の生活行為自立を叶え、精神的な支えとなる」(林, 2024)と述べられている。

今回、市販品を別の用途で利用・加工し、自助具を選定した。そのため、洗体動作や更衣動作が自立し、満足度の向上にもつながったと考えられる。

【結語】

対象者に適応した自助具を検討し提供することでADLの向上が図れる。自助具を使用しADLが向上すると、満足度の向上や精神的な支えにもなることが考えられた。作業療法士として、対象者の望む生活が送れるよう、自助具の選定および市販品を活用していきたい。

非伸縮性テープが筋萎縮性側索硬化症患者の母指対立機能に与える影響－症例報告－

○山岸永典¹⁾, 龜井絵理奈¹⁾, 松尾英明¹⁾,
久保田雅史²⁾, 北出誠³⁾

1) 福井大学医学部附属病院リハビリテーション部

2) 金沢大学医薬保健研究域保健学系

3) 福井大学医学部器官制御医学講座整形外科学領域

キーワード：ALS, つまみ動作, 余暇活動

【はじめに】

筋萎縮性側索硬化症(以下、ALS)により手指機能の低下を認め、ADLや余暇活動の動作に困難さを生じている症例を担当した。母指の対立動作に困難さがあったが、Thumb spica splintを装着することで動作が改善したことを経験した。ALSの疾患の特性や今後自宅での使用を考慮し、より軽量で貼付が簡単な非伸縮性テープで対立位保持を再現し、その効果を検討した。

【対象】

症例は57歳女性で、転倒により左足関節三重骨折を受傷し、当院入院となった。併存疾患として15年前にALSと診断されていた。手指機能として自動の関節可動域は右母指のIP関節(伸展/屈曲)0°/40°, MP関節24°/20°, 様側外転65°, 内転-30°, 掌側外転55°, 内転-35°であった。左母指はIP関節-4°/66°, MP関節2°/26°, 様側外転60°, 内転-20°, 掌側外転45°, 内転-25°であった。カバンジャー対立テストは右9(小指手掌指節皮線), 左7(小指遠位指節間皮線)であった。握力は両側とも4kgであった。発表に際して症例には研究の主旨を説明し、書面にて同意を得て実施した。

【方法】

テープングは両側に行い、母指を対立位にした状態で、母指のIP関節からMP・CM関節上を通り、手関節尺側部まで非伸縮性のテープングを貼付した。評価は計7日間実施し、1・2・5・6日はテープング無し、3・4・7日はテープング有りで実施した。評価項目はピンチ力、9ホールペグテスト、評価中の疲労感をnumerical rating scaleを用い評価した。ピンチ力と9ホールペグテストは2回測定しその平均値を算出した。

【結果】

テープング無し日でピンチ力は右手で0.90~1.35kg、左手で0.80~1.45kgで推移した。一方、テープング有り日では右手で、1.25~1.75kg、左手で1.40~1.70kgといずれも増加傾向を認めた。9ホールペグテストは1日目で左右ともに40秒程度要していたが、2日目以降テープングの有無にかかわらず30秒前後で推移し、疲労感はテープングの有無で変化を認めなかった。

【考察】

非伸縮性のテープングにて母指を対立位に保持することでピンチ力が改善傾向を示した。軽量かつ簡単に装着できるテープングを貼付することは臨床および在宅での補助手段の一つとして有用かもしれない。

ASD 児に対する遊びとコミュニケーションの介入一例～OTST の協働～

○木下美智子¹⁾, 園山貴也(ST)²⁾, 熊野麻美³⁾

- 1) 2) 福井県こども療育センター リハビリテーション室
3) 福井県こども療育センター 小児科

キーワード：自閉スペクトラム症/障害、遊び、コミュニケーション

【はじめに】

自閉スペクトラム症（以下、ASD）児は乳幼児健診で「指さしをしない」「目が合いにくい」「一人遊びが多い」など、言葉の遅れや遊び方にに関する指摘を受けることが多い。当センターに紹介され、小児科受診後に作業療法（以下、OT）や言語療法（以下、ST）が処方されるケースが多くなっている。今回、ASD 児に対し OT の直接介入および OT・ST の協働介入を行い、単調な一人遊びから他者を交えた遊びへの変化、表出手段の拡大などコミュニケーションの効果が見られたので報告する。

【対象と方法】

対象は ASD と診断された 3 歳男児（未就園）。介入期間は 2025 年 5 月 14 日～7 月 30 日で、OT 直接介入 10 回、OT・ST 協働介入 4 回（各 40 分）を実施した。評価は感覚プロファイル、LDT-R 太田ステージ、KIDS、行動観察、JASPER プログラム（遊びのレベル参考）を実施、合わせて一定時間のビデオ撮影を用いた。治療は感覚統合療法、PECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）、TEACCH（構造化参考）、JASPER プログラムを取り入れた。

本研究は当センター倫理審査委員会の承認を受け、発表に当たっては保護者に説明し同意を得ている。

【経過と結果】

初回の入室時には警戒する様子があったが、室内に入った後は走り回り、滑り台から駆け下りてマットに飛び込む、連続でジャンプする等、強い前庭感覚を求める遊びが多く見られた。母親には関わり遊びを求めるが、OT 担当者への関わりはわずかで視線も合わなかった。治療プログラムは、他者への認識を促すために、本児が繰り返す単調な感覚遊びに身体接触を含む関わりを随所に加えた。更に持続しにくい遊びに対しては、触覚や視覚に変化を加えた設定を行うことで自発的に楽しむ遊びが拡大した。使用する部屋は、活動がまとまりやすいように用途ごとに仕切り、①靴の着脱を行う場所②ダイナミックに身体を動かす場所③手先を使う活動の場所とした。OT 担当者と視線が合うようになり、発声が増えるなど効果が見られたので、主治医と相談し OTST で PECS を導入した。結果、LDT-R 太田ステージに変化はなかったが、靴の着脱を含む ADL の拡大、自発的な遊び、他者と共有する遊びの増加、表出手段の拡大など遊びとコミュニケーションの向上がみられた。

【考察】

本児が好む感覚遊びを探り、感覚統合療法、JASPER プログラム、太田ステージを実施することで、担当者との安定した関係が構築でき、遊びの拡大、遊びを通じた共感につながったと考える。同時に ST と協働し効果的に PECS の導入ができることがコミュニケーションの拡大につながったと考える。

教育現場における作業療法士の支援の現状と今後の課題 ～研修会参加者アンケートより見えてきたもの～

○蓑輪千帆^{1) 2)}

- 1) 福井医療大学 保健医療学部
リハビリテーション学科 作業療法学専攻
2) 福井県作業療法士会特別支援教育委員会

キーワード：教育、特別支援教育、都道府県士会

【はじめに】

日本作業療法士協会（以下協会）は、2014 年度より「学校を理解して支援ができる作業療法士の育成研修会」を開催している。福井県作業療法士会（以下県士会）では協会の後方支援を受け 2025 年 7 月に基礎編を開催した。

今回、教育現場における作業療法士（以下 OT）の支援の現状と課題を知ることを目的として、研修会時に実施したアンケート結果を分析し報告する。

【対象と方法】

参加者は 60 名で、回答が得られた 58 名のうち他職種 1 名を除いた 57 名を対象とした。アンケート使用に関して、全員に研究概要と参加辞退の手続きについて文書で説明し、研究倫理に十分配慮して実施した。

質問は、1. 基本属性（地域、分野）2. 教育現場での支援経験の有無 3. 支援依頼元 4. 具体的支援内容 5. 支援上の困難 6. 所属士会に望むこと、の 6 項目（3～5 支援経験のある人のみ、4～6 自由記載）とした。自由記載で得られた回答は意味単位ごとに切片化し、類似内容ごとの概念化を示すサブカテゴリを作成、最後にカテゴリーに分け内容を分析した。

【結果】

福井県（20 名）の他全国より参加があった。分野は発達領域 36 名（63%）と最も多く、支援経験の有無はほぼ半数ずつであった。

派遣依頼元のべ 46 件のうち学校・保育園・幼稚園が 17 件（37%）と最も多く、具体的支援内容は 56 件中子どもへの支援内容が 38 件（68%）と最も多かった。支援上の困難では 45 件中コミュニケーション・連携に関するものが 19 件（42%）と最も多く、所属士会に望むこと 60 件のうち知識・技術向上の機会の提供が 28 件（47%）と最も多かった。

【考察】

教育現場での OT 支援の現状として、学校・保育園・幼稚園からの依頼による子どもたちに対する支援が圧倒的に多く、教員の困り感から依頼が出されていることが示唆された。つまり「教員の困り事を OT が解決する」という意味合いが強く、現状では「事例ごとや単発での介入」が多いと考えられる。

所属士会に求めることより、知識や技術に不安がある OT が多いことが示唆された。また、組織的な体制の整備や OT 同士の繋がりを求める声も多く、県士会の役割は大きいと言える。

【結語】

教育現場での OT 支援で大切な事は、OT 支援のもと教員が問題解決をしていくことである。長期的な視点で学校に関わることで教員と協働できる体制を、県士会主導で構築していく必要があると考える。

個としての受刑者、集団としての刑務所に精神科作業療法士は何ができるか

○南出 耕佑¹⁾, 岡本 利子²⁾, 下川 幸蔵³⁾, 大谷 舞⁴⁾,
松谷 万里名⁵⁾

- 1) 医療法人 嶺南こころの病院 生活支援部
- 2) 医療法人 嶺南こころの病院 総務部
- 3) 学校法人 新田塙学園福井医療大学 作業療法学専攻
- 4) 医療法人 厚生会 福井厚生病院
- 5) 医療法人 健康会 嶋田病院

キーワード：刑務所、社会復帰、コンサルテーション

【はじめに】

令和7年6月1日の刑法改正により、従来の懲役刑・禁錮刑が一本化され、拘禁刑が創設された。これはこれまでの懲役刑・禁固刑だけでは十分な再犯防止効果が得られないことや、受刑者の高齢化・精神疾患等を持つ受刑者の増加もあり、これらの課題に対応するため「懲らしめ」から「更生」へ重点を移すことが目的と明示された。このような背景の中、福井県作業療法士会は福井刑務所から要請を受け、有志チームが発足し介入を開始した。今回の発表では、その実践報告と今後の展望を考察する。尚、対象機関に対して口頭及び文書にて同意を得ている。

【対象と方法】

頻度：月2回（60分/回）

対象：①知的障害を有する受刑者、②精神疾患を有する受刑者、③アルコール等依存症を有する受刑者

内容：①②SST、③心理教育（依存症）を行う

【経過と課題】

当初は刑務所内で実施可能なプログラム提供を行うことだけを想定していたが、既に熱心な刑務官によって巧妙なSSTが実践されていた。しかし、その取り組みが所内全体の合意とは言い難く、残念ながら様々な評価がなされていた。つまり所内では法改正に即した新たな考え方、伝統的な考え方の二分化が起こっている課題が浮き彫りとなった。

そのため、単にプログラムを提供するだけでなく、コンサルテーションが必要と考えた。具体的には①刑務官に教育講演、②受刑者に対するストレスコーピング評価を提案した。

刑務官の評価技術を向上させることで、対象行為を読み解く以外に、受刑者のストレスコーピングスキルで何が足りなく、何が過剰なのかを判別できる。つまり単純な犯罪者という評価から特別な支援を必要とする者として視点を広げられる。それにより単なる懲罰ではなく、受刑者が社会に戻り、自立した生活を送るには、どのような支援や更生プログラムが必要なのかを明らかにできると考える。

今回の介入によって受刑者への理解が深まり、刑務官の認知や教育指導への取り組み方が変容することを期待している。

【考察】

病をみる医学モデルと同様で、罪業をみる文化から、その個人をみる生活モデルへの移行を作業療法士として、どのようにアシストできるのかを模索している。現在、複数の刑務官で「根拠に基づく指導」「我々が重犯罪に繋がらないための初めの砦だ」が合言葉になりつつある。発表当日はその進捗と達成状況を報告する。

パーキンソン病友の会スマイルイベントの企画に携わって

○佐藤 英子¹⁾, 嶋田 祐介¹⁾, 北野 智恵美¹⁾,
近田 美香²⁾, 川端 彩華²⁾

- 1) こばんだ訪問看護ステーション
- 2) 福井赤十字病院

キーワード：パーキンソン病、エンパワメント、患者会

【はじめに】

難病情報センターによれば、福井県のパーキンソン病(PD)関連疾患の医療受給者証所持数は1023人であるが、全国PD友の会の福井県支部の会員数は28名に留まる。今回、同会の周知を目的としたイベントを同会役員とともに企画、開催したため報告する。発表に際し同会役員の了承を得た。

【準備】

同会の周知とともに、地域でPD患者を支援するチームの強化や運営補助を目的に医療福祉関係者も参加可能とした。また患者同士、家族同士のエンパワメント機能の強化を意識した。シンポジウムのテーマは、「在宅で質の高い生活を長く保つには」とし、作業療法士、看護師、介護支援専門員、福祉用具専門相談員に講師依頼した。リハビリ体験会は、LSVT®BIG有資格者に依頼した。悩み相談会は、付箋を使ったグループワーク方式とし、進行は役員に依頼した。福井県作業療法士会に後援を依頼した。広報は、チラシは神経内科のある病院や居宅支援事業所等に役員及び弊社にて郵送、配布した。士会からメールや郵送で会員宛にチラシ配布、HPに掲載した。

【結果】

参加者は44名（内当事者10、同伴者9、医療福祉関係者25）、笑顔が多く活気溢れる会となった。アンケート回答者は27名で、わかりやすかった、ためになったとの回答が9割以上を占め、「楽しいひとときでした」「またやってほしい」など肯定的な記載が多かった。反面、相談会の項で「あまり話せなかった」2名、「もっと話したかった」3名、自由記載で「時間が短くもっと聞いたり話したりしたかった」とあった。後日福井新聞及び日刊県民福井に記事が掲載された。

【考察】

患者会支援は、エンパワメント機能を壊さないよう、専門職は地域の社会資源と利用条件といった情報提供に留めるなど、介入のレベルを考えながら支援を行う必要があるとされる（江本、2016）。また、PDカフェを運営する中で、人と人の関わりであるためトラブルになりネガティブに働くことも多く経験したとの報告がある（小川、2024）。今回、参加者が前向きな気持ちで帰れること、エンパワメント機能を発揮できることを意識し、役員、参加者のおかげで笑顔の多い会となった。新聞にも掲載され、目的である同会の周知はある程度行えた。今後の課題としては①当事者、家族がより多く話し合える時間と仕組みの検討②当事者、家族がより多く参加できるための仕組みの検討が挙げられる。

地区の花見会における壮年団の活動報告

○山本 和雅¹⁾

1) 福井赤十字病院 リハビリテーション科

キーワード：地域活動、遊び、レクリエーション

【はじめに】

作業療法 5 カ年戦略において OT の地域社会への参画を推進している。勤務機関や市町村からの依頼が多いが、居住している地域で住民として活動することが重要視されている。今回、筆者は居住する地区の壮年団団長に任命され、地区的花見会で子どもを対象に企画を運営したので報告する。また、倫理的事項を遵守し、同意を得て行った。

【壮年団活動】

コロナ過前は、総会、懇親会、村祭り、交流会や研修会の参加を行っていたが、コロナ過後は、すべて中止になり活動していなかった。

【地区の花見会】

村祭りが中止となり、住民の交流する機会がなくなったため、2024 年から花見会を行った。花見会の内容としては、公民館で食事をしながら、子ども太鼓、今昔クイズ、歴史動画鑑賞だった。

【花見会までの経過】

壮年団への依頼内容は和室で子ども 10~20 人ほどを対象に「なんかやってくれんか」ということだった。その後、壮年団の SNS で連絡したが返事がなかった。そのため、行事内容と協力依頼の記載してあるチラシ作成を行い、子ども達と一緒に地区内を配りながら協力者を募った。また、お菓子詰め放題、テレビゲーム大会、探検bingo、ウェルカムボード作成、進路相談を企画し、準備を子ども達と一緒に行った。

【花見会当日】

壮年団から 1 名、その他から 5 名手伝いに来てくれた。普段は村行事には参加しない 2 名がお手伝いに来てくれた。職歴、コミュニケーション能力、性格等を考慮し、仕事を振り分けた。参加者は大人 15 名、子ども 17 人だった。参加者はそれぞれ好きな課題に取り組んでいた。完成したウェルカムボードは花見会の最後に披露し、センター内に飾ることになった。子ども、大人が交流でき、好意的な意見が多く聞かれた。

【考察】

コロナ過以降、地区的活動は縮小傾向で、負担は軽減しているが、関係性は希薄になっている。今回の活動では、作業活動を通して地区の方々の交流を促すことができたと感じた。今後は、住民として、地域共生社会の構築に寄与できるように OT としてできることを模索したい。

【おわりに】

地区的花見会において子ども対象に企画運営を行った。人々の活動・参加を支援し、地域共生社会の構築においては作業療法士が必要と思われる。

フレイル予防における作業活動の有効性

○田嶋 神智¹⁾、下川 幸蔵²⁾、石田 圭二²⁾、櫻井 明彦³⁾

1) 医療法人 博俊会 春江病院

2) 福井医療大学 保健医療学部 リハビリテーション学科
作業療法学専攻

3) 福井大学 学術研究院工学系部門 生物応用化学講座

キーワード：高齢者、フレイル、作業

【はじめに】

福井県では、2017 年より東京大学高齢社会総合研究機構が開発したフレイル予防プログラムを実施しており、併せて「日常生活動作」「バランス能力」「意味のある作業の遂行度および満足度」の付加調査を実施している。

本報告では福井県内で実施したフレイル予防プログラムの「深掘りチェック」と、付加調査に関する評価の、どの項目と関連性があるのかを明らかにし、生活そのものに介入することが重要であることを明らかにするために実施した。尚、対象者には同意を得て実施している。

【対象と方法】

令和 6 年度に福井県内で実施したフレイルチェック事業に参加した地域在住高齢者 201 名（男性 54 名、女性 147 名）、平均年齢は男性 74.38 ± 8.83 歳、女性 77.02 ± 7.32 歳を対象に、実測を含む口腔機能、運動機能、社会性に関する深掘りチェック 10 項目と、「お家でチェック」（福井県）の生活動作チェック、バランス能力、一番したい（意味のある）作業の聞き取りと遂行度および満足度の調査結果との関連性と、フレイルリスクハザード別の深掘りチェック項目を多項ロジスティック回帰分析により解析した。

【結果】

「階段昇降」や「上方リーチ」などの生活動作が有意に関連していた ($p < 0.01$)。また、意味のある作業では「遂行度」および「満足度」が何れも関連を示した ($p < 0.05$)。これにより、身体機能面の指標に加え、個人が重要と考えている作業の遂行度や満足度が、フレイル関連の深掘りチェックと密接に結び付くことが明らかとなった。また滑舌、片足立ち上がり、下腿周囲長に加え人とのつながりや社会参加も有意に関連し、交流や参加が少ないほど高リスクと強く関連した。

【考察】

「階段昇降」や「上方リーチ」といった日常的な動作は、単なる体の動きだけではなく、筋力やバランス、持久性の向上の維持にも繋がると考えられる。生活動作や意味のある作業の遂行度や満足度の関連性から、身体機能面のみならず価値を感じる活動の実行と、心理的充実感がフレイルと結び付いている可能性が考えられる。また、身体機能や口腔機能の低下に加え、社会的交流や活動の不足もフレイルリスク増大と結び付き、筋力維持と社会参加促進の双方が予防に重要である。

これらの知見は、身体機能訓練に加えて個人にとって意味のある作業の継続を支援することがフレイル予防に有効であることを示唆し、心理的な充実感は継続的な活動へのモチベーションにも繋がると考えられる。